# 天孫降臨における猿田彦

白崎　勝

## 天孫降臨の謎

天孫降臨の地で、邇邇芸命（ににぎのみこと）は次のように詔したと、古事記に記している。

「ここに詔りたまひしく、『此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を眞来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉き地』と詔りたまひて底つ岩根に宮柱ふとしり、高天原に氷ぎ(椽)たかしりて坐しき。」（倉野憲司校注・岩波書店）

天孫降臨では出発地の高天原とともに、降臨の地がどこなのか、謎になっている。また、出雲国譲りがなって実施されたが、その行き先が出雲ではないことや、道案内した猿田彦がどんな人なのかも謎である。

## 此地は韓国に向ひ

有力な天孫降臨の地は、臼杵郡の高千穂町と霧島の高千穂峰である。詔に『此地は韓国に向ひ』とあることから、博多湾岸説もある。

次図は神武東征の経路を調査する中で見つけた、壱岐と唐津にある高尾山を、直線で結び北と南に延長した図である。狗邪韓国から遠く高千穂峰に続く直線が見つかった。

地図１　魏志が記す行程の方角

この直線上には人吉市の高尾山もあり、偶然で無いことがわかる。この直線は１５２度の角度で、夏至の日の出方角６２度との差は９０度である。夏至の日の出方角を東としたときの、南北に向く直線といえる。

魏志倭人伝は対馬国から一支国への渡海を、「また南に一海を渡る」とこの１５２度の方位を南と記している。そこで上陸後も、この基準で行程の方角を記録し続けたのだろう。このことが、その後の混乱を招いた。「東南伊都国」「東南至奴国」「東行不弥国」が有力候補の糸島市・春日市・宇美町に一致する。さらに、不弥

国から「南至投馬国」の西都市、「南至邪馬台国」の朝倉市、「其南狗奴国」の菊池市の全てが１５２度の方角基準で整合する。

邇邇芸命は狗邪韓国から高千穂峰に続く、この奇跡の直線を知っていて、詔の『此地は韓国に向ひ』の一言を発したのであろう。そして高千穂峰から狗奴韓国方向にある山に、韓国岳と名付けたと推測する。　また高千穂峰の東に当たる日向国を、朝日の直刺す国、薩摩の阿多付近を夕日の日照る国と表現したのであろう。

地図２　高千穂峰付近の地図

## 高千穂峰

高千穂峰に登ったことがある。記紀に記す高千穂峰から浮島にいたる表現が、登山経路と良く一致していることに気がついた。付近の地図を載せる。

・天の浮橋　邇邇芸命は雲海の中の高千穂峰に立ったのであろう。遠くの山々が島のように見えて、霧島と名づけたと考える。高千穂峰から降りるときは、お鉢に登り返す鞍部を通る。鞍部(背門丘)の両側が霧の海で橋に見えたのだろう。

・二上峯　お鉢は高千穂峰に添うようにある火口である。登山口から見ると、両端が高くなっていて、二上山のように見える。また添（そふり）の山峯という表現も当たっている。

・梯子　お鉢からの下山道では、後ろ向きに岩に掴まりながら降り、その姿は梯子を降りるに似ている。

・浮島　登山道入口にある神籬（ひもろぎ）斎場は平地になっていて、霧の中を下りてきたとき、浮島に見えたのであろう。浮島平の表現も納得できる。

## 頓丘（ひたおか）

日本書紀は高千穂からの経路を、『そ宍の空国を、頓丘から国覓ぎ行去りて、吾田の長屋の笠狭碕に到る。』と記している。この頓丘を現代訳では丘続きに歩いたとしている。これを具体的に考えてみた。当時、山に名前も無い時代なので、山々に丘という名を付けながら進んだと解釈した。そこで調べてみると北海道を除く全国で５３の丘と岡という名の山が見つかった。その内、４６までも南九州に集中していた。地図３に示す。高千穂峰から笠沙の野間岬に向かって、岡または丘と付く名の山が続いている。野間半島から鹿児島湾を渡り大隈半島を巡り、逆「の」の字型の経路は、八代海の獅子島で終わっている。

| 番号 | 名　称 | 所　在　地 | 番号 | 名　称 | 所　在　地 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 国見が丘 | 宮崎県西臼杵郡 | 28 | 横堀の岡 | 鹿児島県肝属郡 |
| — | 母智丘 | 宮崎県都城市 | 29 | 陣ノ岡 | 鹿児島県鹿屋市 |
| 2 | 虎ケ尾岡 | 鹿児島県霧島市 | 30 | 霧島ケ丘 | 鹿児島県鹿屋市 |
| 3 | 文字岡 | 鹿児島県霧島市 | 31 | 草野丘 | 鹿児島県曽於郡 |
| 4 | 二牟礼岡 | 鹿児島県霧島市 | 32 | 宇都丘 | 鹿児島県志布志市 |
| 5 | 雨祈岡 | 鹿児島県霧島市 | — | 勿体岡 | 鹿児島県串間市 |
| 6 | 丸岡 | 鹿児島県霧島市 | 33 | 岳野丘 | 鹿児島県志布志市 |
| 7 | 鏡ケ岡 | 鹿児島県霧島市 | 34 | 登見ノ丘 | 鹿児島県鹿屋市 |
| 8 | 貝吹岡 | 鹿児島県霧島市 | 35 | 狐ケ丘 | 鹿児島県鹿屋市 |
| 9 | 茶屋ケ岡 | 鹿児島県さつま町 | 36 | 惣陣が丘 | 鹿児島県霧島市 |
| 10 | 有年ケ岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | 37 | 陣が岡 | 鹿児島県曽於市 |
| 11 | 田原丘 | 鹿児島県さつま町 | 38 | 大野岡 | 宮崎県都城市 |
| 12 | 弥三郎ケ岡 | 鹿児島県さつま町 | 39 | 霞ケ丘 | 宮崎県西諸県郡 |
| 13 | 須杭岡 | 鹿児島県さつま町 | 40 | 土然ケ丘 | 宮崎県小林市 |
| 14 | 小毛野岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | 41 | 霞ケ丘 | 宮崎県小林市 |
| 15 | 今村岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | 42 | 城ノ岡 | 宮崎県小林市 |
| 16 | 火立ケ岡 | 鹿児島県いちき串木野市 | 43 | 八幡丘 | 宮崎県えびの市 |
| 17 | 陣ケ岡 | 鹿児島県いちき串木野市 | 44 | 鳶巣丘 | 鹿児島県伊佐市 |
| 18 | 鳶ケ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 45 | 鳥神岡 | 鹿児島県伊佐市 |
| 19 | 餅ケ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 46 | 黒崎丘 | 鹿児島県出水郡 |
| 20 | 剱ノ岡 | 鹿児島県姶良市 | 47 | 城ケ岡 | 兵庫県三田市 |
| 21 | 牟礼ケ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 48 | 雙ヶ岡 | 京都市右京区 |
| 22 | 牛頭野岡 | 鹿児島県日置市 | 49 | 石堂ケ岡 | 大阪府豊能郡 |
| 23 | 甚九朗岡 | 鹿児島南さつま市 | 50 | 天樫丘 | 奈良県高市郡 |
| 24 | 乗越の岡 | 鹿児島南さつま市 | 51 | 君ケ岡 | 宮城県刈田郡 |
| 25 | 西の丘 | 鹿児島南さつま市 | 52 | 陣ケ岡 | 岩手県紫波郡 |
| 26 | 亀ケ丘 | 鹿児島南さつま市笠 | 53 | 迦陵嚬伽岡 | 岩手県一関市 |
| 27 | 辻風岡 | 鹿児島県南九州市 | | | |

**表 1**　全国の岡と丘の名が付く山

21, 22, 23 の直線や 39, 40, 41 の矢印型の配置は、『朝日の直刺す国、夕日の日照る国』を強く意識した配置であることが分かる。

地図３　南九州の岡または丘と名が付く山の分布

この岡や丘の配置や名前に、古代人の多くの心が、託されていると考える。気がついたところを幾つか挙げる。

1、牟礼は岡の意味であるが、牟礼ケ岡の名がある。岡の中の岡の意味か、幾つもの経路が牟礼ケ岡を指している。

2、岡と丘が混合しているが、丘の数は1，2、3，4，3，2，1となっている。最初の田原丘の前に有年ケ岡を配置して、母智丘から田原丘まで一年を有したと記録している。この天孫降臨は七年を要したことが分かる。

3、姶良市と鹿児島市の間の難所、竜ヶ水を避ける道を切り開いたと思われる岡が残されている。

4、大隅半島の曽於市付近には、弥五郎どん伝説が残されているが、名の良く似た弥三郎ケ岡がある。その他、甚九朗岡も見える。弥五郎どんは猿田彦のことと考える。

5、岡の直列で鹿児島湾の渡海は、指宿から、大隅半島の根占に渡ったことが分かる。

6、宇都丘が大隅半島にあるが、宇都の地名は、南九州に集中していた。

7、八代海の獅子島の黒崎丘が最後の丘であるが、この海で遭難があった名と考える。遭難者は記紀の記述から、猿田彦が候補としてあがる。黒崎丘と鳥神岡を結ぶと高千穂峰に続いていて、天孫降臨を先導した猿田彦の心を遺したように見える。

## 神武東征と岡

神武天皇は、邇邇芸命が岡と丘の名の山を、残したことを知っていたことが分かる。東征の途中、「岡之水門」や「岡田宮」の名前を残している。そして東征最後の地点の橿原に、区切りの丘を使った「天樫丘」を残している。邇邇芸命の心を今実現したとの思いがあったのだろう。混乱を避けて、東征途中の山には丘を付けないで、最後の地点に名付けている。

日本武尊もいくつかの岡を残している。地名には多くの岡を残している。

## 猿田彦大神の動機

東霧島神社を訪ねたとき、猿田彦は別名、佐田彦と掲示していた。当時、人に名前も無い時代なので、出身の村の名に、彦を付けた事が予想される。そこで九州にある佐田の地名を検索すると、次の３ケ所が見つかった。

地図４　朝倉にある佐田

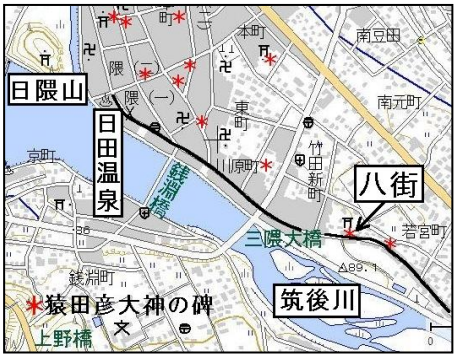
① 長崎県諫早市飯森町佐田
② 大分県宇佐市安心院町佐田
③ 福岡県朝倉市佐田

①の諫早市は宇都地名の北端になり、佐田山もある。猿田彦に関係があるかもしれない。③の朝倉市は先の研究で、高天原があったと推定したところである。朝倉の佐田村を地図に示す。

猿田彦は八街という道が多く交わるところで、天孫降臨を待ち受けていた。ここで疑問がある。どうして天孫降臨の情報をつかみ、八街を通ることを知っていたかである。そして天孫降臨を先導する動機が何だったかである。佐田村は高天原から10km 弱の距離である。佐田彦が佐田村の人ならば、うわさが聞こえていても不思議ではない。ここ佐田村は高木神の本拠地である。高木神の裏での工作があったのではないだろうか。伴の人達のみでは心もとないと考え、天孫が生まれ、旅が出来る少年になるまでに、佐田村で屈強な人を選び、南九州を下見させていたのではないだろうか。それならば、確かな待ち受けや動機も理解できる。

## 八街はどこか

朝倉から高千穂峰に向かうには、筑後川沿いに遡り、日田、阿蘇を越えていることが予想できる。日田はいくつかの街道が交差するところで、八街と称するにふさわしい。朝倉から日田まで




地図５　日田市の八街

30km あるので、天孫降臨出発の知らせを受けた猿田彦は、佐田村から山道を駆けて日田で待ち受けできる距離である。日田を訪ねると、辻々に猿田彦の碑が残り、最も待ち受け場所に適したところに、八街神の碑を見つけた。そこは日田温泉を通る旧道の先にある、若宮神社付近である。これより先は山道に入り待ち受けできない。日田の街には日隈山、月隈山、星隈山と呼ぶ低い岡があって、天孫降臨が来るのを見張ることができる。

## 天孫降臨の道

一行は日田から尾根道伝いに小国町、南小国町を経て阿蘇盆地に降りる。盆地を横切り高森で、外輪山の高千穂野に登る。この時、佐田彦の猿のような活躍が「あいつは佐田でなく猿田だ」と感嘆されて、猿田彦と呼ばれるようになったと考える。外輪山を幣立神宮付近に降り、そこから高千穂町に向かった。

高千穂町の入口に国見が丘がある。新しい国の入口で、始めて「丘」の山の名を付けて、これ以降の岡や丘の名付けのきっかけとなった。国見が丘を訪ねると国見する邇邇芸命の石像があった。

写真１　国見丘の天孫降臨像

高千穂町から潅漑稲作を伝えながら日之影町、延岡と進みシーガイヤ付近で禊を行い、西都原に入ったと考える。禊の場所と西都原は高天原の、夏至の南に相当し「襲の伊都」の意味があったと考える。また投馬国は伊都国の都と邪馬台国の馬から来た「都馬国」だったかも知れない。

邇邇芸命はすでに、青年になっていたであろう。その後、高千穂峰に登り薩摩半島と大隅半島を巡る天孫降臨の旅を行った。笠沙では木花咲耶姫と出逢い、海幸彦と山幸彦の双子をもうけることになった。

平成２５年３月１６日　九州の歴史と文化を楽しむ会で講演

狗邪韓国に続く
沖ノ島に続く
高尾山
高尾山
高取山
鷹取山
鷹取山
高取山
高取山
高天原
八街
高取山
国見が丘
幣立神宮
高尾山
黒崎丘
西都原
高千穂峰
阿多
勿体岡
福岡県
佐賀県
長崎県
大分県
熊本県
宮崎県
鹿児島県

天 孫 降 臨 の 道